

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 22 日現在

機関番号：11401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370309

研究課題名(和文) 冷戦期合衆国表象文化(史)とナショナリズム/ソフト・パワーの関係性に関する研究

研究課題名(英文) Historical Studies of the Cold War American Representation as Soft Power

研究代表者

村上 東 (MURAKAMI, AKIRA)

秋田大学・教育文化学部・教授

研究者番号：80143072

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：『冷戦とアメリカ 覇権国家の文化装置』(臨川書店)は日本アメリカ文学会機関誌『アメリカ文学研究』(52号)に前川玲子氏の書評「冷戦期のアメリカの文化、歴史、文学を検証する上で今後の研究者にとって必読の書」をいただくことが叶った。また、田代真氏は「理論から遠く離れて」(『新時代への源氏学』第9巻所収)において『冷戦とアメリカ』に言及し、謝辞も頂戴した。『アメリカ映画のイデオロギー』刊行。大田、塚田、村上が寄稿している。また、第88回英文学会全国大会において「メディア、帝国、19世紀末アメリカ」を実施した。覇権国家発展期を視野に入れることで今後の路線強化を図った。

研究成果の概要(英文)： Our collection of papers, “The Cold War and the United States,” (2014) received favorable reviews like Reiko MAEKAWA’s in “Studies in American Literature” (52) and Makoto TASHIRO’s acknowledgement in his paper on American influence on Japanese literary criticism (“Far from the Literary Theory”). “Ideologies in the American Film” (2016). Ota threw a new light on rather complicated relationships between Britain and the United States in the movie industry; Tsukada pointed out that the imperial image of strong manhood showed a miserable decline in the 60s. And Murakami analyzed discrepancies between the realities and the representation of the counterculture. And at the 2016 convention of the English Literary Society of Japan, we held a panel, “The Media, the Empire, and the United States at the Turn of the Century” and started a new approach to our research by covering the first half of the 20th century to strengthen our historical analysis.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アメリカ合衆国 冷戦期 表象文化史 ソフト・パワー

1. 研究開始当初の背景

文学史は、詩歌や小説といった文学作品を系統化し価値づけ、その国家が保有する文化資本のカタログの機能を持つことで、その国家のナショナリズムを維持、強化してゆく。いかなる作品がナショナリズム強化の栄養源として高い価値を有するのか、それゆえ高い商品価値を有するのか、を示すカタログなのである。そうした文学作品が海外へと輸出され、輸入した国々で受容され、単に好かれる、売れるということも含めて、影響力を行使してゆく際、ジョーゼフ・ナイが定義したソフト・パワーとなり、輸出した国家の政治力(軍事力さえも)補強する。そして、自国に還流した影響力や利益はその国家の(文化)ナショナリズムを強化してゆく。

2011年から13年まで私たちが取り組んだ基盤研究(C)「冷戦期における合衆国ナショナリズムとソフト・パワーとしての表象文化の研究」において、第二次世界大戦でファシスト枢軸国側を倒し、いわゆる自由主義=資本主義陣営の頂点に立って、世界に対し強い影響力を行使してゆく合衆国がその文化ナショナリズムを覇権国家に相応しい規模と内容に整えてゆく姿、そしてその過程に付随する諸問題を、文化ナショナリズムとソフト・パワーの視点から読み直す作業に着手した。大戦前の合衆国では、大学教育においても合衆国文学の講義は稀であったのに対し、戦後、高等教育再編成に伴い、合衆国文学も定番商品化される。社会主義陣営と戦う合衆国政治に見合った文化戦略となったものは、作品の内部を中心に精緻な分析技術を駆使し、冷戦期の合衆国ナショナリズムに不都合な社会批判を備える作品を排除する新批評であった。新批評やその立役者であったニューヨーク知識人に関しては、Fredric Jameson や Alan Nadel らの先行研究があり、私たちも重要な参照枠としている。また、国内においても宮本陽一郎氏、越智博美氏の業績が私たちの路線にとって稀有の援軍となってきた。

私たちが中心となって出版した『冷戦とアメリカ 覇権国家の文化装置』(2014)においては、冷戦期合衆国の文化ナショナリズムを概観するのみならず、新批評が世界的なソフト・パワー商品に仕立て上げたモダニズム文学にもメスを入れている。その後、冷戦期文化戦略の準備段階となった1930年代、冷戦期文化に対する批判が前景化された1960年代にも研究範囲を広げ、冷戦期を挟み撃ちするかたちで研究の深化を図った。

前後の時代をも守備範囲とし、問題群を時系列で扱う研究姿勢を取ることで今回の「冷戦期合衆国表象文化(史)とナショナリズム/ソフト・パワーの関係性に関する研究」では、文学史、文化史の書き換え作業という側面を強化していった。

2. 研究の目的

前回の基盤研究(C)を継承、発展させることが大前提である。ひとことで言えば、冷戦期の合衆国表象文化の政治学を考察する研究であり、その全体像を、ソフト・パワーとしての側面を前景化しつつ、文学、映画、文化全般(とそれらに傾注された批評・研究)の各分野を点検しながら、再構築することを目的とする。言い換えれば、自国における文化資本の生産が、対外的にもソフト・パワーとして商品価値を持つゆえに、世界的な文化ヘゲモニーの確保につながり、ナショナリズム強化策として自国に還流してゆく構図を、なるべく多くの具体的事例について明らかにしてゆくことを目的とした。

その際に、前回の基盤研究(C)における反省を踏まえ、<1>冷戦期と前後する1930年代と1960年代を視野に収めることによって、冷戦期以前から確認できる事象でその後の合衆国および世界全体にも影響を持つ問題群を捉えてゆく、<2>時系列で問題群を整理することによって文学史、文化史の捉え方に新機軸を打ち出すことを研究全体の目的とした。

具体的に述べれば、ローザベルト政権は来るべき冷戦期を念頭に置いた文化政策の策定は既に1930年代に着手している。また、1960年代に顕在化した対抗文化には冷戦社会、冷戦文化批判という側面があり、こうした研究路線の拡張によって、今回の基盤研究(C)を深化、発展させることが目的であった。

3. 研究の方法

方法論といっても、理系とは異なり、表象文化作品を丹念に分析し、議論を積み上げてゆくことが中心となる。そして、口頭発表や論文(集)によって成果をまとめ、次の研究段階を準備することとなる。

1930年代の合衆国表象文化には、ナショナリズム的な色彩が色濃く盛り込まれていた。左翼的と見做される『怒りの葡萄』、『誰が為に鐘は鳴る』といった映像作品も民主主義を売るソフト・パワーという機能を制作された時点で既に備えていたし、対抗文化を代表する映画監督ロバート・アルトマン作品も、ナイが指摘するように、ソフト・パワーとしての意味を持っている。時代の幅を広く取り、時系列で問題群を考察することによって、映画におけるソフト・パワーを浮き彫りにできよう。

また、塚田が以前から取り組んできた、映画におけるマッチョな男性像の変遷が教えてくれることは、合衆国が覇権国家としてその頂点を極めていた期間でも衰退をたどっており、ターザンのような帝国主義的男性表象の対極に位置する1960年代のユダヤ系駄目男像につながる表象が徐々に準備されていた事実を明らかにできよう。

大田が統括してきた英米表象文化(批評・

高等教育) 交渉史も、時代の幅を広げ、問題群を時系列で扱うことにより、成果が期待できる。中山が進めてきたSF・ファンタジー系統の小説も、時代の幅を広げ、問題群を時系列で扱うことにより、新たな視点を獲得することを目指した。

村上は、全体を統括するとともに、合衆国音楽における1930年代キャンオン化等の問題を扱った。

4. 研究成果

各自が相当数の発表や論文を残しているので、代表的なものを紹介しておきたい。

『終わらないフェミニズム』(日本ヴァージニア・ウルフ協会他編、研究社、2016)に大田が寄稿した「ウルフ、ニューヨーク知識人、フェミニズム批評」は、冷戦期の新批評(文学におけるモダニズムを商品化したニューヨーク知識人)から現在に至る英米高等教育交渉史を歴史的に俯瞰する。日本におけるソフト・パワー受容に関しても示唆に富む内容となっている。

代表研究者も編者のひとりとなっている『アメリカ映画のイデオロギー』(論創社、2016)には、大田、塚田、村上が寄稿した。大田は「ノエル・カワードと再婚の喜劇としての『或る夜の出来事』」において、英国の映画が既に戦前から冷戦期の覇権国家合衆国と複雑な結びつきを持っていたことを指摘し、ソフト・パワー交渉史において成果を示した。塚田の論考「ニューシネマ・ターザン」は、彼の映画におけるジェンダー研究を手っ取り早く知るには都合のよい歴史的視座を持ち、帝国主義的な男性像が60年代後半には無残な失墜を遂げていたことを前景化することによって、帝国主義的な男性像の変遷をまとめている。村上はロバート・オルトマン監督の『バード シット』を扱い、表象される対抗文化と現実の歴史とのずれを分析した。

塚田が企画、司会を担当した日本英文学会第88回全国大会シンポジウム「メディア、帝国、19世紀末アメリカ」は私たちの研究の新たな方向性を示すものとなった。冷戦期における覇権国家合衆国を捉え直す作業において世紀末まで守備範囲を拡大することによって得られるものが多かろうという方法論の更新である。このシンポジウムを元にした論集『メディアと帝国』(仮題)ミネルヴァ書房より2018年刊行予定である。この折の発表で中山は、『オズの魔法使い』などのファンタジーに支配・被支配の関係が根深く確認できる点を指摘したうえで、サンタクロース神話のソフト・パワー化まで議論を広げていった。本年度日本アメリカ文学会全国大会においてシンポジウム「対抗文化と伝統、対抗文化の伝統」を実施し、新たな論文集へと発展させてゆくこともつけ加えておきたい。

2014年3月刊行の『冷戦とアメリカ 覇権

国家の文化装置』(臨川書店)は、私たちの基盤研究(C)「冷戦期における合衆国ナショナリズムとソフト・パワーとしての表象文化の研究」(2011~2013)のまとめと言えるものだが、日本アメリカ文学会機関紙『アメリカ文学研究』(52号、2016)に前川玲子氏の書評「冷戦期のアメリカの文化、歴史、文学を検証する上で今後の研究者にとって必読の書」をいただくことが叶った。また、日本文学研究を代表する小西甚一に合衆国新批評がもたらした影響を考察する田代真氏の「理論から遠く離れて」(『新時代への源氏学』第9巻所収)においても『冷戦とアメリカ』に言及し、謝辞も頂戴した。文系の研究は、発表や論文をみる限り個人プレーの形態をとるが、問題意識や方向性を共有する研究仲間が増えることで加速、深化するものであり、自分たちが精進するだけでなく、ネットワーク拡大も図り、さらなる成果を目指したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計10件)

2016年度:

[1]塚田幸光「フリークス・アメリカーヘミングウェイ、ロン・チャニー、身体欠損-」、関西学院大学法学部外国語研究室『外国語外国文化研究』XVII(2017)1-23(査読なし)

[2]塚田幸光「Polluted but Beautiful-アトミック・ランドスケープの文化学」、日本映画学会『日本映画学会第12回大会プロシーディングス』(2017)102-111(査読なし)(<http://jscs.h.kyoto-u.ac.jp>).

[3]大田信良「ポピュラー・チルドレンズ・リテラチャーの勃興とガールズ・スクール・ストーリー」、『津田塾大学紀要』49(2017)55-74; 301(査読なし)

[4]大田信良「『英文学』・英語文学の特質と成長」、『東京学芸大学紀要 人文社会科学系 I』68、(2017)47-70(査読なし)

[5]大田信良・大谷伴子、「コドモの「居場所」はどこに? 英国映像文化としての『聖トリニアンズ女学院』と教育空間の変容」、『東京学芸大学紀要 人文社会科学系 I』68、(2017)71-83(査読なし)

[6]大田信良「『自由と規律』 英国の文化・教育の特質とはなんだったのか」、『英学論考』45、(2016)33-55(査読なし)

2015年度:

[7]中山悟視【招待論文】「エコクリティカル

な視座から読むヴォネガット 『スラップスティック』再評価』、『エコクリティシズム・レビュー』第8号、36-44, 2015. (査読なし)

[8]大田信良「ウォルター・リップマンの『自由全体主義』とは何だったのか ネオリベラリズムの始まりとしての一九三〇年代？」一橋大学大学院言語社会研究科 2014 年度紀要『言語社会』第9号 特集2 三浦玲一、149-62. (査読なし)

2014 年度 :

[9]村上東「シオン大通りの時代とエドワード・ルイス・ウォーレント」『秋田英語英文学』第55号、12-23. (査読あり)

[10]塚田幸光「性」を縛る-GHQ、検閲、田村泰次郎「肉体の門」-、関西学院大学『先端社会研究所紀要』第11号(2014)、47-60. (査読なし)

〔学会発表〕(計18件)

2016 年度 :

[1]MURAKAMI Akira, "Tsuji Takashi's Use of Traditional TANKA Elements." Panel: Directions in East-Asian Studies. 19 May, 2016. (Tel-Hai College) The 13th Biennial Conference of Asian Studies in Israel

[2]村上東【招待講演】「文化ナショナリズムがかたちを整える時 アイヴズ、西部劇、テディ・ローザヴェルト」日本英文学会全国大会第88回大会シンポジウム「メディア、帝国、19世紀末アメリカ」2016年5月29日(京都大学吉田キャンパス)

[3]中山悟視【招待講演】「世紀転換期ユートピア小説における支配の欲望」日本英文学会第88回大会シンポジウム「メディア、帝国、19世紀末アメリカ」2016年5月29日(京都大学吉田キャンパス)

[4]塚田幸光【招待講演】「大衆とフォト・テクスト-ニューディール、FSA、スタインベック-」九州アメリカ文学会第62回大会シンポジウム「アメリカ大衆文学とモダニズム」(九州大学伊都キャンパス) 2016年5月8日

[5]塚田幸光【招待講演】「ボディビル世紀末-Eugen Sandow と初期映画の身体論-」日本英文学会第88回大会シンポジウム「メディア、帝国、19世紀末アメリカ」2016年5月29日(京都大学吉田キャンパス)

[6]Yukihiko TSUKADA 【招待講演】“Catastrophic Tokyo: Re-thinking the

Nuclear Walking Dead in Japanese Comics, ” American Comparative Literature Association, “ Ecocriticism in Japan: Season 2 ” (Harvard University) 2016.3.19.

[7]Yukihiko TSUKADA, “Hemingway and Cross-Media: Newsreel, Greco-Turkish War, and “On the Quai at Smyrna”,” XVII. Biennial International Ernest Hemingway Conference, “Panel: Smyrna & Hemingway’s Political Development” (Dominican University) 2016.7.22.

[8]Yukihiko TSUKADA, “Framing Femme Fatale: Gender and Ideology in *To Have and Have Not*,” Faulkner and Hemingway Conference, “Faulkner and Hemingway in Hollywood II” (Southeast Missouri State University) 2016.10.22.

[9]Yukihiko TSUKADA, “Danchi and Terrorism: Imaging the Nuclear Landscape in *The Man Who Stole the Sun* (1979),” The Association for the Study of Literature and Environment in Korea(ASLE-Korea), “International Symposium on Literature and Environment of East Asia” (Dongguk University) 2016.11.6.

[10]塚田幸光「Polluted but Beautiful-アトミック・ランドスケープの文化学-」日本映画学会第12回大会シンポジウム「<汚>の映画史」(大阪大学) 2016.11.26.

[11]大田信良「ポスト占領期日本のなかの『英文学』 いま冷戦を考える意味」日本ヴァージニア・ウルフ協会7月例会、2016年7月16日(成蹊大学)

2015 年度 :

[12]村上東「ナショナリズム、西部劇、ロバート・オルトマン」2015年11月7日(宮城学院女子大学)日本英文学会東北支部第70回大会

[13]Yukihiko TSUKADA, 【招待講演】“William Faulkner, Hollywood, and the Gothic South,” The Center for Faulkner Studies, BioKyowa Award Lecture (Southeast Missouri State University) 2015.11.11.

2014 年度 :

[14]MURAKAMI Akira, “Kusano Shinpei: Ecologist without Ecology.” Panel: Literary Glimpses of Tōhoku: Nature, Marginality, and the Accident. 25 May, 2014 (the University of Haifa) The 12th Biennial Conference of Asian Studies in Israel, 2014

[15]村上東「ロック、ナショナリズム、文化資本」2014年11月29日(弘前大学)日本英文学会東北支部第69回大会

[16]中山悟視【招待発表】「カート・ヴォネガットの未来像 二つの映像作品 Harrison Bergeron(1995)と2081(2009)」第53回日本SF大会<「視覚映像文化とSF」の部屋>(つくば国際会議場)2014.7.19.

[17]塚田幸光【招待講演】「イメージの異境-フレーム、ロード、『パリ、テキサス』-」日本英文学会中部支部第66回大会シンポジウム「路(みち)と異界のアメリカ-ロード・ナラティブと他者」(中京大学)2014.10.18.

[18]大田信良【招待講演】「サイドのオリエンタリズム論と冷戦期アメリカのリベラル・イデオロギー」「文化表象のグローバル研究」プロジェクト第10回研究会成城大学グローバル研究センター2014.11.21.

(図書)(計11件)

2016年度:

[1]細谷、中尾、村上(編著)『アメリカ映画のイデオロギー 視覚と娯楽の政治学』(論創社)2016.10.(総328頁)この編著書は以下の3篇の論文を掲載:村上東「跳ぶ前に観る ロバート・オルトマンの『バード シット』と対抗文化(?)」79-195;塚田幸光「ニューシネマ・ターザン-フランク・ペリー『泳ぐひと』と映像の性/政治学」300-325;大田信良「ノエル・カワードと再婚の喜劇としての『或る夜の出来事』 『長い20世紀』のなかの映像文化」106-35.(査読あり)

[2]塚田幸光「グッバイ、ローザ-フォークナー、ニューディール、「老い」の感染-」『ウィリアム・フォークナーと老いの表象』(松籟社)2016.2.(総288頁)99-130(査読なし)

[3]大田信良「ウルフ、ニューヨーク知識人、フェミニズム批評 もうひとつ別の『成長』物語?」『終わらないフェミニズム 「働く」女たちの言葉と欲望』(研究社)2016.9.(総346頁)275-98.(査読あり)

[4]大田信良「あれは幻の南方大陸か? ジェームズ・クックの航海日誌」『旅にとり憑かれたイギリス人 トラヴェルライティングを読む』(ミネルヴァ書房)2016.8.(総326頁)21-43.(査読なし)

[5]大田信良「サイド、「アメリカの優勢 公共空間の闘争」、ウィリアムズ「文化の社会学 アソシエーションおよび階級分派の概念の歴史化のために」『文化表象のグ

ローカル研究』(成城大学グローバル研究センター)2016.4.(総311頁)201-20.(査読なし)

2015年度:

[6]塚田幸光「シネマティック・ロボットミューテクノロジー、暴力、『時計じかけのオレンジ』-」塚田幸光(編著)『映画とテクノロジー』(ミネルヴァ書房)2015.4.(総312頁)123-147(査読なし)

[7]塚田幸光「ゲイ・カウボーイと自閉するアメリカ-『ブロークバック・マウンテン』-」『映画で読み解く現代アメリカ オバマの時代』(明石書店)2015.4.(総318頁)160-173(査読なし)

[8]塚田幸光「ターザン、南海へ行く-エキゾチック・ハリウッドの政治学-」『島国文化と異文化遭遇 海洋世界が育んだ孤立と共生』(関西学院大学出版会)2015.3.(総254頁)57-75(査読なし)

[9]大田信良「功利主義の伝統と『英文学』のなかのロレンス 幸福はどのように表象されるか」『21世紀のD・H・ロレンス』(国書刊行会)2015.10.(総327頁)94-113.(査読あり)

2014年度:

[10]村上東(編著)『冷戦とアメリカ 覇権国家の文化装置』(臨川書店)2014.3.(総417頁)この編著書は代表研究者による「序にかえて」5-20.と以下の4篇の論文を掲載:村上東「ナショナリズムは女性ファンも抱きしめて 『ローマの休日』と合衆国戦後外交」53-86;塚田幸光「福竜・アンド・ビヨンド-エドガー・A・ポーとニュークリア・シネマの政治学-」89-117;中山悟視「生暖かい終末 冷戦作家ヴォネガット」147-169;大田信良「誰もエドワード・サイドを読まない? 批評理論と冷戦期のアメリカ文化」335-68.(査読なし)

[11]塚田幸光「プロダクション・コードの性/政治学-ジェンダー、幽閉、『サンセット大通り』-」『アメリカ観の変遷 上巻【人文系】』(大学教育出版)2014.10.(総168頁)135-152(査読なし)

〔産業財産権〕

出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村上 東 (MURAKAMI, Akira)
秋田大学・教育文化学部・教授
研究者番号：80143072

(2) 研究分担者

中山 悟視 (NAKAYAMA, Satomi)
尚絅学院大学・表現文化学科・准教授
研究者番号：40390405

研究分担者

塚田 幸光 (TSUKADA, Yukihiro)
関西学院大学・法学部・教授
研究者番号：40513908

研究分担者

大田 信良 (OTA, Nobuyoshi)
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：90233139

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()